

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	安原 美千子
論文担当者	主査 篠原 尚
	副査 石戸 聡
	副査 三輪 洋人
学位論文名	Adverse oncologic outcomes of adenocarcinoma of the anal canal in patients with Crohn's disease (クローン病関連肛門管癌の検討)
<p style="text-align: center;"><b>論文審査の結果の要旨</b></p> <p>クローン病は高頻度に肛門病変を伴い、肛門管腺癌の発生母地となる。本研究は、これまで未解明であったクローン病関連肛門管腺癌の腫瘍学的特徴を明らかにすることを目的とした臨床研究である。対象は1998年から2018年までに本学で肛門管腺癌と診断、根治手術を施行した102例。症例をクローン病関連群とクローン病非関連群に分類し、患者背景、病期分類、手術術式、術後治療、病理組織結果、再発形式について後方視的に検討し、局所無再発生存率、無再発生存率、全生存率のリスク因子を抽出、さらに腫瘍の壁深達度ごとに治療成績を検討した。結果、クローン病関連群は非関連群と比較して若年発症(45歳 vs. 62歳, <math>p &lt; 0.001</math>)で管外型の割合が高く(61.8% vs. 5.9%, <math>p &lt; 0.001</math>)、腫瘍径が大きかった(<math>p &lt; 0.01</math>)。Cox regression analysisを行うと、壁深達度 T3,4 は局所無再発生存率、無再発生存率、全生存率の、クローン病関連/非関連は局所無再発生存率、全生存率の独立した危険因子として抽出された。そこで壁深達度ごとに治療成績を検討すると、深達度の低いT1,2では、両群間で有意差を認めなかったものの、深達度のより高いT3,4では、関連群の予後は非関連群と比較して有意に予後不良であった(5年局所無再発生存率; 32.5% vs. 70.4%, <math>p = 0.001</math>, 無再発生存率; 15.9% vs. 40.7%, <math>p = 0.04</math>, 全生存率; 25.8% vs. 71.0%, <math>p = 0.007</math>)。このように、壁深達度とクローン病関連の有無は肛門管腺癌の治療成績に影響を与え、とくに壁深達度 3,4 のクローン病関連群の予後は極めて不良であった。クローン病関連肛門管腺癌は、経皮的組織検査を含めた術前検査による正診率が低いことから、著者らは、クローン病患者の肛門病変のサーベイランスを積極的に行うことが大切であり、そのため、確定診断が得られる前であっても、発癌が疑われる際には、外科的根治切除を1つの選択肢として考慮すべきであると結論付けている。</p> <p>本研究は、クローン病関連肛門管腺癌の腫瘍学的特徴を初めて明らかにし、その予後との関連や早期発見の重要性を示唆した臨床的に意義のあるものであり、学位論文に十分値するものと評価した。</p>	